I-15

創宇社建築会の第一回及び第二回新建築思潮講演会について
ー創宇社建築制作展覧会への出品作品との比較を通してー
On the first and second symposia on modern architecture ideology held by Sousha-Kenchiku-Kai
ーBy re-examination of the works for the architectural exhibition of Sousha-Kenchiku-Kaiー

○庄司　兼悟[1]　　田所　辰之助[2]　　川嶋　勝[3]
Kengo Shoji　Tatunosuke Tadokoro　Masaru Kawasima

Abstract:
Sousha was formed mainly on Bunzou Okamura in 1923 just after the Great Kanto Earthquake, and they performed cultural activity such as a trial, the exhibition of eight times, the holding of the lecture until 1930 so that a claim of creation and the expression born with an educational background difference corrected what was lost, and the claim weighed a lecture of the expressed twice and the seventh, the eighth exhibition and reevaluated it.

１．はじめに

「創宇社建築会」(以下創宇社)は関東大震災直後の 1923 年10 月に岡村蚊象を中心として逓信省経理局営繕課工事係に勤務する５人の同人で結成された．彼らは高等教育機関ではなく実務教育機関である各種学校などで実務的教育を受けたのちに営繕課工事係として、技師と職工の間で図面の清書や現場の監督を務めながら，８回の展覧会の開催と作品展示、建築雑誌や新聞などメディアへの記事の掲載，講演会の開催などの文化的活動を 1923 年から 1930 年までおこなった．その行動力の背景にあったのは明治期以来建築界に生まれた学歴格差によって彼ら建築技術者の労働から創造と表現の主張が失われたことであり，この欲求を満足させるため彼らは労働時間外に文化的活動を展開していった．

２．研究目的と方法

通史では創宇社の文化的活動―展覧会の開催，作品の展示，メディアへの記事の掲載，講演会の開催など―を通して創作された作品が実際の建築としては残らず，建築論の展開に影響を与えなかったとされている．本研究は創宇社結成の契機となった学歴格差や建築界の合理主義が彼らの社会主義活動にどのように結びついたか、その経過を確認し，創宇社の活動について検証することを研究目的とする．

当時創宇社がおかれた社会的背景，展覧会の作品，文化的活動，各種資料に残された創宇社の評価を再検討し，加えて岡村の思想が創宇社同人に与えた影響が大きく反映されていると思われる第７回，第８回の展覧会の同人の作品と同時期に開催された２回の思潮講演会の論文とを比較検討する．

３．大正期の社会的背景

明治期における建築は，初期には明治政府による組織的な外国人技師の招聘がおこなわれ西洋建築技術が邦人建築家に継承された．その後多くの邦人建築家が技術を習得し後期にはその目的をほぼ達成していた[1)]．日清戦争後には増税政策が原因で土地を手放す農民が増加する一方で地主階層は肥え太り貧富の差が生まれ，日露戦争後にはそれが増大する．これにより民衆の解放思想が盛んになり「自我」，「自己」の言葉が氾濫する[2)]．建築界でも建築家個人による自己表現の創造に関心が高まり自己を主題にした建築表現や建築思想が発現された．このように欧州歴史主義を模倣した明治建築に反発する動きが自己の新たな創造的表現を生み出し「分離派建築会」（以下分離派）が誕生する．

1923 年 9 月 1 日に発生した関東大震災は東京市の大部分を倒壊，焼失させ既存の建築技術の崩壊を認識させ土蔵造りや煉瓦造りに代わり鉄筋コンクリート造が増加し建築の合理化が進んだ．この震災を契機に岡村の呼びかけで創宇社が結成され宣言を起草し，同年 11 月には第１回の創宇社建築制作展覧会を開催するに至った．

４．創宇社の思想

２）第１回新建築思潮講演会と第７回展覧会

新建築思潮講演会の第１回は 1929 年 10 月に開催された．岡村は「合理主義反省の要望」という題目で，実践のためには「作品がプロレタリアートの為であるか、又ブルジョアジーの為であるか、この問題を見極める」，「其建築の存在は事実必然性を認めうるかどうか」，「現実性」，

１．日大理工・院（前）・建築
２．日大理工・教員・建築
３．日大短大・教員・建築

「可能性」を理解する必要があるとしている．労働者の結核患者達のためのサナトリウムを例に挙げて社会的に意味付けることが最も必要であると述べ，具体的に入院患者数を推定し建築費，施設の維持費などを全て現実的に決める必要があると説いている．建築は工学的範疇に入るべきではあるが現在言われている意味の合理主義ばかりを信頼することは観念論に転落する危険があり，建築家は自然科学と社会科学に則った弁証法的考察の上で建築を実践すべき,「故に『合理主義の反省を要望』する」と講演している[3]．なおこの講演後の第７回展覧会では同人が作品の主旨説明を「国際建築」に載せているが竹村のサナトリウムの計画を始め他の作品にも民衆のために社会的意味付けをしたとの説明が多く[4]，岡村のこの講演での思想を強く反映している．

３）第２回新建築思潮講演会と第８回展覧会

第２回講演会は第８回展と同時期に開催された．岡村が前年「アトリエ」に掲載した「新建築における唯物史観」と第１回講演の「合理主義反省の要望」と第２回講演の「新興建築家の実践とは」の３部がある．「新建築における唯物史観」で岡村はコルビュジエの考える新建築を取り上げる．コルビュジエは住居を「人間の住む機械」であると考え建築は生理学的，衛生学的，経済学的，心理学的純粋科学的研究の生的表現であるが加えて最も高度な意味の芸術としての数学的秩序，瞑想を含めた完全な調和であり，合目的主義的建築のみでは完全ではなく芸術性を認めることで新しい建築は秩序的総合的の全的存在となる，と主張する[5]．そしてこの考えが以降の「合理主義反省の要望」と「新興建築家の実践とは」に展開される．「合理主義反省の要望」の続きと位置付ける「新興建築家の実践とは」では，前回の講演で宿題となっていた現代資本主義社会で建築を実践するには実際どうしたら良いかという問題を取り上げて，産業の合理化と同じように建築の合理化を行ったとすれば労働者の生活および経済的不安を問題化させる，機械的合理主義で建築を建てることや、社会現象から切り離して建築を考えるのは危険であると述べている．また資本主義における問題である過剰人口に対して大衆の最も適切な住形式としてのジートルンクの存在も社会主義の立場では無条件では受け入れ難いとして現代の建築家が取るべき実践的方向はプロレタリアートの運動に参加して建築家の責務を果たす以外にはないと述べている．続けて第８回の創宇社展に出品した「紡績工場の女工寄宿舎」[6]を例に取り上げているが，寄宿舎の非衛生で劣悪な生活状態を実際に調査した結果に適合させ科学的基礎考査と経済的考査を経た解決案とのことである．最後に我々は方法論を確立しそれを如何にして実践まで高めなければならないのかが当面の問題である，建築家諸氏とともにプロレタリア建築理論を完成し実践したいと結んでいる[7]．

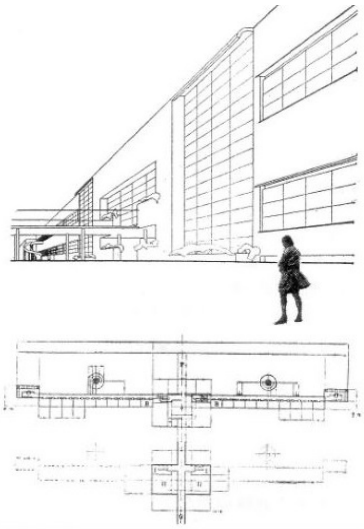

Figure 1. 紡績工場の女工寄宿舎

５．まとめ

同人は展覧会と講演を続けて開催し彼らが切望した創造と表現の発現を展開したが，第８回の展覧会の頃には創宇社内部から新建築の理論と技術の獲得を目的とした展覧会自体の役割の終了が認識されこの回が展覧会の最後となった．その後岡村が渡欧したことから創宇社の活動は事実上停止した．前述のように創宇社の誕生には彼らの職場環境，分離派の存在，関東大震災が大きく関わっていることが分かる．本稿作成に関わる資料を分析して改めて創宇社の存在意義を考えてみると，展覧会という形で発現された既成概念に囚われない彼らの自由な創作活動が現存する建築界に問題提起をすると同時に，講演を通して海外の著名な建築家の思想を解説し現代建築のあるべき方向性を示唆するなど同人の為だけではなく次世代を担う若い建築家達もともに成長してゆこうという啓蒙の姿勢にあったと考えられる．特に２回の思潮講演会で示された岡村の思想には同人の置かれた職場における学歴格差や階級意識が常に根底に流れていて第７回と第８回の展覧会の同人の作品に強く反映されているが，この思想はその後も建築界で活躍する同人を始め他の建築家達の建築思想にとってその原点と成り得たので，実際の建物の実現という観点から見ると運動の成果は確かに貧弱であったが，運動と思想がその後の建築界全体に与えた影響は非常に大きなものだったと言える．

【参考文献】
1　稲垣栄三『日本の近代建築』上（鹿島出版会）P96～101 1979 年
2　鈴木貞美『生命で読む日本近代』（日本放送出版協会）P104 1996 年
3 岡村蚊象「第一回新建築思潮講演会　合理主義反省の要望」『国際建築』1929 年 11 月
4 第七回創宇社建築制作展覧会」『国際建築』（美術出版社）6-2 1930 年
5 岡村蚊象「新建築における唯物史観」『アトリエ』（婦人画報社）1929 年 9 月
6 白鳥義三郎「創宇社展覧会所感」『国際建築』（美術出版社）6-11 P4～12 1930 年
7 岡村蚊象「新興建築家の実践とは」『国際建築』（美術出版社）1930 年 12 月